



園だより

.....16. 12月号

応答する

千葉で11月に雪が降るなんてことを考えたことがありませんでした。まして、積るなど、ありえない事だと高をくくっていました。しかし空からは白いものが舞い降りてきて、園庭を白く覆っていきました。54年振り、11月の初雪となり大人は慌ててみかんを収穫しました。カンガルー組はいち早く2階のテラスで雪合戦。お昼過ぎには、たくさん子どもたちが園庭で雪あそびでした。氷のように冷たく重い雪でしたが、子どもたちの顔は、それはそれは嬉しそうでした。そうそう、子どもってこういうことが大好きです。手も足もつめたくなって、まっかになって、痛くなっても、満面の笑みで「あー、楽しかった。」と言うのです。「はあ〜、ゆきってなんてたのしいのかしら♪」朝の門で、ばら組のYちゃんの一語をお母さんが聞かせてくれました。子どもの時だからこそと思うことがいっぱいあります。それらのことは一つ残さず経験しておいてほしいなあと思う雪の日、そんな子どもたちの傍らにいる幸せを感じます。

話は変わりますが、つい先日、子育てに関わる人たちが集まる講座に参加した時のことです。3人の内2人の方がお話の中に“スマートフォン”の問題を取り上げていました。これまでもテレビやゲーム機の普及による子どもの生活への影響が指摘されてきました。しかし、“スマートフォン”の問題はこれとは少し問題が異なるように感じています。先のテレビやゲームは、専らそれを見たり使ったりする子どもたちが、夢中になってしまうことでコミュニケーションが阻害されました。しかし、スマートフォンの問題は、養育者(親)自身がこれに夢中になることによって子どもとのコミュニケーションに問題を生じさせています。ここに大きな違いがあります。ファミリーレストランで会話のない家族連れ、両親はスマホ、子どもはポツンと置き去りです。電車の中で、窓の外に面白いものを見つけた子どもが一生懸命お母さんに話しかけていますが、お母さんはスマホに夢中です。子どもはあきらめて一人で外を眺めています。子どもの一番そばにいる者が、子どもからの呼びかけに応答することがなくなっています。“大人の方からコミュニケーションを断つ”という酷い状況が生まれてしまっています。家族は居ても子どもはひとりぼっちです。これは由々しき問題です。赤ちゃんは生まれてすぐに語りかけられます。「可愛い〜。」「あれ、泣いちゃったの？おっぱいかな？」「おむつ、濡れちゃったね。気持ち悪かったね。」そして抱かれたり、なでられたりたくさんのスキンシップももらいます。ただ眠っているだけでも、そばにいる大人が語りかけてくれるのです。小さな小さな存在ですが私たちは応答しています。応えてくれる人がいるので、赤ちゃんは命をつないでいくことができるのです。これは生物としては最も重要なことです。それで子どもの中に安心が生まれます。さらに、その大人は心地よい感情で自分を満たしてくれるのです。おっぱいを飲みながら赤ちゃんはお母さんの顔を見ている。自分を見つめてくれる視線を待っています。大好きな人がいつも自分を見てくれる、守ってくれる、応えてくれる、大好きと言ってくれる、抱きしめてくれる、それで小さな人たちの中にも親への愛着が形成されていくのです。親子の愛着は初めからあるものではなく応答を通して育まれていくのです。更にこの応答する関係が子どもたちを支え成長を促します。「見て〜。」「聞いて〜。」は少し煩わしい時もあるのですが応じてほしいのです。お母さん、お父さんはどんな時にも応えてくれる、見ていてくれると子どもたちが確信できること、それが子どもたちの育ちにはなくてはならないのです。愛されて安心して、初めて子どもたちは自立していくことができるのです。スマートフォンを置いて、子どもとの時間を見直してみましょう。今しか見られない子どもの姿、子どもの言葉があります。今しかできないことがあります。耳を傾け、眼差しをむけ、応答する大人でありたいと思います。

「実際子どもは親のまむきを求める。どうかすると抑え切れない強さにその要求が湧いてくる。親が恋しいのである。(中略)ただ純粋にまむきを合わせたいのである。」(「育ての心」倉橋惣三著)